

山陰地方，東郷湖周辺の羽衣伝説について

～ 1. 調査ノート～

門 田 眞知子

Sur la Légende de la Déesse céleste Hagoromo
dans la Région de Togo et Kurayoshi (Hoki)

KADOTA Machiko

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第4巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES(TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES)Vol.4 / No.2

平成19年11月30日発行 November 30,2007

山陰地方，東郷湖周辺の羽衣伝説について

～1. 調査ノート(1)～

門田 眞知子*

Sur la Légende de la Déesse céleste Hagoromo
dans la Région de Togo et Kurayoshi (Hoki)

KADOTA Machiko

キーワード：東郷・倉吉羽衣伝説，白鳥伝説，南條宗貞，羽衣山

Key Words : Togo, Kurayoshi, Nanjyo, Ueshiyama, Légende du Hagoromo, Mythe du Cygne

I. 倉吉，東郷に伝わる羽衣伝説

まず鳥取の伯耆地方には，大きく分けて二つの羽衣伝説が伝えられている。

(その一) 倉吉に伝わる羽衣伝説：

この話は倉吉の地名の由来ともなった「倉」と「吉」の二人の姉妹の出自に関わる。姉妹は農夫と天女から誕生したという。東郷湖で水浴びをしていた天女の羽衣を農夫は奪う。天女は仕方なく農夫と一緒にいる。しかし，ある日，天女は農夫が隠していた羽衣を見つけ出し天上にかえる。天に昇ってゆく母を追い，地上の二人の子供が太鼓を打ち笛を吹きながら二つの美しい山まで追いかける。隣接する山のため母親の姿がすぐに隠れて見えなくなる。「ゲドウな」と言ったところから外道山(げどうざん)，そして楽器を打ち吹くところから打吹山(うつぶきやま)の謂われとなったという。天女は二度と地上に戻らない。子供二人が姉・弟の場合もある。倉吉市葵町の賀茂神社境内とも関わる。長谷寺も関係あるようだ。また一説には天女が水浴びしたのは倉吉市東町の大岳院の境内の池であったともいう。(2)

(その二) 東郷湖近くの山と関わる伝承：

日本海に接した東郷湖すぐそばの羽衣石山(うえしやま)に関わる伝説である。その山頂に築城した城主は南條貞宗といい，彼が天女と結ばれ二子をもうけ南條家の始まりとなったという氏祖伝説である。こちらは伯耆の中でも意外に知られていない。十四世紀の足利，南北朝・戦国時代の史実とも絡み合っって背景が複雑な様相を見せている。そのせいか表向きには分かりやすい素朴な倉吉の山・地名の由来譚が，むしろ鳥取の羽衣伝説として通っているようだ。史実，思惑の交錯する東郷の氏祖伝説の奥には，さらに時代を遡って古代の世界観に行きつく様相が潜んでいるのかもしれない。

美しい東郷湖近くの「うえしやま」と読ませている「羽衣石山」と「羽衣石城」，そして南條太

* 鳥取大学地域学部地域文化学科(フランス文学、比較文化論)

祖と天女という組み合わせには意外性を感じさせる不思議さがある。

実際は、この地方に伝わる昔話紹介などには、これらをミックスして一つの羽衣伝説に仕立ててしまっているものも多くみられるようだ。(3)

実のところ、伯耆に伝わる羽衣伝説自体、それほど鳥取でも広範に活発に研究されている気配は感じられない。これまでのところ日本昔話の研究者、稲田和子氏の編著作などが際だっている。さらに民話・民俗学者の鳥取大学名誉教授の野津龍氏がこの伝説を精査されていて、2002年鳥取で開催された第十七回国民文化祭において、シンポジウムが催され全国の代表的な羽衣伝説が採り上げられている。その野津先生のご厚意で最近、シンポジウム時の貴重な資料と御論攷をいただいた。(4) その中で野津龍氏は羽衣伝説を論じている書物として水野祐の『羽衣伝説の探求』(産報社昭和五十二年)を高く評価出来るとしながらも、唯一の欠点として鳥取の羽衣伝説については「一言半句も言及されていない」ことを強く指摘されている。日本の羽衣伝説の一覧表から何故倉吉・東郷の羽衣伝説が漏れてしまったかも含めて、それだけに秘境に眠る希有な羽衣伝承を探るのは意味のあることであろう。(5)

II. 日本における羽衣伝説

羽衣伝説は周知のように、北は青森から南は鹿児島を経て沖縄に至るまで日本列島の各地に伝播している馴染みの伝説である。水野祐によれば、二十余数の話が列島に存在する。

同じ鳥取に伝わる有名な神話、「因幡のシロウサギ神話」の類型が鳥取県以外の列島に見受けられないことを想うとき、この羽衣神話の伝播の規模と普遍性にあらためてこの神話伝説の奥に潜む核心が何かに惹かれる。

天女が海辺、川辺、湖の畔に降り来たりて、羽衣を置き(=自分の体から離して)、水浴びをするのが羽衣伝説の通常のパターンである。その場合、水辺は美しいということが絶対条件となっている。またその羽衣を掛ける木や大きな石が近くにあることも重要なポイントとなる。天女の数も、一～三人、また八人に至るまでばらつきがあるが、一人の場合が一番多い。そして主人公になるのは一人っきりであり、いつも姉妹の末っ子がそのターゲットとなる。また希に天女が鳥、しかも白鳥であることもある。

ところで日本には三大羽衣伝説が存在する。なんといっても有名なのは静岡の三保の松原の伝説で、優美で雄大な富士山を背景に持つ。謡曲の「羽衣」はここでの伝承を題材にしている他、戦前から教科書にも掲載されてきたのはこの伝承であるという。ここでは羽衣をかけるのに松の木がある。またそのヴァリエーションとしては、富士山そのものが舞台となりそこに天女が舞降りて再び飛び立ったという話もある。これにはどうも竹取伝説との類似性がみられるようである(水野祐『羽衣伝説の探求』)。あとの二つは、近江の北の余呉湖の伝説と丹後の伝説である。特にこの二つは最も古い羽衣伝説とされている。余呉湖の事例は実は白鳥伝説となっているのが興味深い。(6) また最古の丹後の羽衣伝説にもさらに二つのヴァリエーションが存在するようである。(7)

水浴びをしている最中に美しい天女と羽衣を見つけた下界の人間が羽衣を隠し、天女は致し方なく下界の男-その多くは、漁民、猟師、農民-に従って、一緒に暮らし子供を産む。子供は多くの場合、二人もしくは四人という偶数である。こちらは、倉吉の羽衣伝説に呼応する。倉吉の場合、男は農民であった。子供は二人であった。また下界の男の仕事の変容に関しては、これも水野祐によれば、原型は漁民であったのが、農耕文化になれば農民、山中であれば猟師という風に環境に応じ

て変化が生じるということである。また羽衣を盗み、天女と一緒に住まわなければならないのが、老夫婦というパターンも希にある。その場合には当然、子供はいない（丹後の比治山の二つの羽衣伝説の一）。

羽衣伝説では天女は天空に昇り、戻ってこない。しかし、一旦地上の住民となったからには羽衣をもどされても天上には帰らないという希有なケースもある（丹後の風土記に載る二つめの羽衣伝説）。(8)

Ⅲ. 日本の白鳥伝説

水野祐は、白鳥伝説と羽衣伝説は、「説話の構造上まったく同一の伝説と見て差し支えない」と断じている。特に海外においてはこの白鳥伝説の伝播分布が広範であるから、この点は重要である。

さらに彼は、「日本のように、南北に長く連鎖する列島に立地している所では、北方からも、南方からも、それら各地域からの伝説の伝播してくる可能性をもつ。それゆえ日本の羽衣伝説は、アジア大陸の、北方系説話の伝播によるものか、それとも南方系説話の伝播によるものか、あるいはその両者の伝播によって、両要素の混淆したものと考えべきものなのであろうかは、説話学上きわめて重要で、かつ興味深い課題である」と言っている。さらに図式的には北からは白鳥伝説が、列島本土は大陸と南から羽衣伝説が入ってきたとする。時代が下ると、鎌倉時代には韓国、中国から神仙伝説が入ってきてそれは日本の羽衣伝説に影響を与えたと指摘する。(9)

『記紀』に登場する古代神話の英雄、ヤマトタケルの魂が白鳥となって昇天する最期は、もともと伊吹山で出会った「牛のように大きな」白いイノシシを侮ったために神が化身したことに気づかず、そのあと大神の様々な攻撃にあい、それが原因でヤマトタケルは死ぬということに対応する。ただし、谷川健一氏が指摘しているのは、『日本書紀』では、白猪ではなく大蛇（おろち）であり、それは紛れもなくスサノヲの大蛇退治を想起させる。姉のアマテラス大神が天の岩屋戸に隠れたとき、うっかり剣を伊吹山に落としてしまったが、スサノヲがやつけた大蛇から出てきた剣をスサノヲから貰い、かつて自分が落とした剣が戻ったと姉はよるこんだ、という件を紹介していて、これを伊吹山の当地の金属文化と結びつけているのは興味深い。(10)

一方、『古事記』においては、ヤマトタケルは三重で死んだとき魂は白鳥となり飛んでゆく、となる。后や子供達が後を追っていくが、それは河内国の羽曳野におりたので、そこには白鳥陵が建てられた。他にも二カ所、大和国の奈良の御所市あたりなどにも降りたので同様に白鳥陵を建てた。しかしついにはヤマトタケルの魂の白鳥は天高く飛び去ったという。ここに、水野祐は、「羽衣伝説、とくに白鳥処女説話の影響を受けていたことを示す」と指摘する（同書所収、I日本の羽衣伝説）。白鳥伝説を日本の天皇の祖先に採り入れねばならなかった動機とは一体なにであろうか。さらに神聖な「始祖伝説」として、白鳥伝説は意味を持つに留まるのだろうか。

Ⅳ. 東郷の羽衣石山（うえしやま）伝説と南條家周辺

それでは、これら羽衣伝説を網羅している書物にも知られなかった、山陰地方の因幡の西、「伯耆」の特に東郷に伝わる羽衣伝説には、以上のような羽衣伝説の事例と対照してどのような特質がみられるであろうか。

思うに、郷土歴史資料にも書かれている当地の羽衣伝説は、一般の人々の目に触れる機会が今まで少なかったのではないと思われる。野津氏は「鳥取人の謙虚さ」がわざわざいたのではとも言われているが。

天女伝説の語られる資料は少ないとしながらも野津氏が挙げられている資料のうち、『伯耆民談記』（寛保二年：1742年）は肯定的にも否定的にもこの逸話にはかなり触れているのでまずこの書物に目を向けてみたい。これは江戸時代、池田藩の家臣で伯耆国倉吉出身の松岡布政の手になる。医師であった小泉友賢の著した因幡地方の最初の地誌『因幡民談記』（1680年頃）に続き、当時の鳥取西部の東郷や倉吉、米子あたりを知る貴重な資料となっている。『伯耆民談記』を開いてみると、巻之三「一、池の事」の項目の筆頭に、「東郷池」が次のように語られる。

「河村郡東郷松崎にあり、當国無二に大湖にて、風景絶佳なり。周り三里余り、十二ヶ村之を圍繞し、近岸処々神社仏閣堂を並べて建てり。」野津氏は、この湖は羽衣石山山頂から見ると、鶴が羽を広げたように見えるところから「鶴の湖」とも呼ばれてきたと紹介されている。白鳥ではなくて鶴であるということが何か示唆的である。

そして「今は跡方もなく荒れ果て、見る人懐旧の涙催さる」（同書）と書かれているのは、貞治五年（1266年）、南條の太祖伯耆守貞宗によって建立された「羽衣石城」（うえしじょう）のことである。秀吉後の夏の陣に加わり負けて滅ぼされた。城の周囲は多くの兵士たちの殺戮の舞台となった。現在は、城は子孫といわれる人達を中心に再建され羽衣石（うえし）城跡とその歴史の保存に力が注がれている。

ここに羽衣石城（うえしじょう）と記されるのは、「うえし」という名の地名が以前から存在していたらしいのと、この山頂の泉で天女が水浴びをし、さらには山頂近くには回向岩なるものがあり、言い伝えでは羽衣がかけられた岩だということである。そして南條の太祖貞宗は、そこに降り立った天女と結婚し二子を得たという言い伝えも残っている。しかしこの『伯耆民談記』（巻之十二）には、城の名の由来をこう説明している。

「此山を羽衣石と称する謂われとて伝うる所あり。蓋し初めは崩岩山と言ひしが、南條貞宗此の山に始めて城を建つ時、崩岩の名を忌みて『君が代は天の羽衣まれに着てなつとも尽きぬ巖なるらん』と言う古歌を取りて祝し羽衣石の山と改めしとかや。」

そのあとに、

「又、一説に往古の事なるが、此辺の農夫一日此山を過ぎけるに、一人の美女、傍の石の上に衣を乾かし、流れにたたずみ居たり、其姿を見るに、雲の鬢髪（びんぱつ）月の顔・・・」と羽衣の天女の話が語られ、だからこの山を「羽衣石」という、と述べた後に、

「斯のいわれによりて此山を羽衣石と号すとなり、然して、此の如き伝説我が国所在類似の事多し、天女降臨の事、異説様々にして信ずるに足らず」と打ち消しているが、又、一説にはとして、「羽衣石」として天女の羽衣も乾かした石があり、またその磐にのぼると「天上の人たるがごとき心地」になるから、といった諸説を紹介している。

そのような流れの中に、「一、南條家紋の事」の見出しをつけ、記す。「相伝う南條の太祖天女の羽衣を奪い、遂に夫婦となって二子を生ず、年経て後、天女二子を欺き羽衣を得たり、その時夕顔の蔓に手寄り、再び天上す南條名残を惜しみ、夕顔を以て家紋と定む。然れども是虚談にして信じるに足らず」と、松岡布政は断言している。

ただ、ここで注意すべきは、大磐がすでに羽衣伝説と結びつけられていたこと、そして何よりも列島に散在するこの羽衣・天女伝説は東郷や倉吉の伯耆地方ではよく知れ渡っていたということである。

ある。

なお，家紋が「夕顔」であるというのは希有だというのは松岡も後世の史家たちも認める。そして，「夕顔」は蔓科の植物として天女がそれを利用して元の天上の世界に戻る道具として必要であったことを暗示しつつ南條家の家紋としたというのは，決して冗談ではないだろう。『伯耆民談記』の続きは以下のようなものである。

「或る人の言えるは南條の紋所は花久留須（はなくるす）というものなり。」

「クルス」というのは十字架を意味する。これは花ではなく模様をあらわす。南條家はキリシタンと関係あったと窺える。このことは後世の郷土史家も記している。

「南條氏の家紋は，最初「三ツ割橘」を使用したようである。その後，「夕顔」，最後は「花久留須」が使われている。

家紋で最もめずらしいのは「夕顔紋」である。」（として，上述の『伯耆民談記』の一説を紹介している。）⁽¹¹⁾「花久留須は，元清が切支丹大名小西行幸の影響を受け，元忠の後見者となるや，姻族関係にある亀井氏「隈立て四つ目紋」（十字紋）と同様に花久留須を使用したと考えられ，元清の墓の○印はやはり切支丹信者のしるしであろう」と言っている。⁽¹¹⁾

元清は何代もあとの子孫である。ということはその辺りで，切支丹の洗礼をうけるような南條子孫がでて不思議ではないだろう。

V. 南條貞宗の出自など—父親は塩冶高貞，母親は弘徽殿

郷土史家・城郭考証士で『羽衣石南條氏盛衰記』及び『塩冶高貞と南條氏追録』の編著者である河本英明氏は，南條氏の手がかりとして『伯耆民談記』，『羽衣石南條記』，『南條民語集』，『伯陽民談記』，『陰徳太平記』，『因伯地名考』などを挙げた上で，「正確な資料がきわめて少ない」と前置きし，南條氏の出自をこのように始めている。

「南條氏の始祖は，出雲の守護・塩冶高貞の二男とする説を多くの史書が採用している。」これを前提として，父親の出自が説明される。

「高貞は，第五十九代宇多天皇を祖とする近江国佐々木荘を出自とし，近江源氏系の佐々木義清から代々継承された守護の地位は，高貞の曾祖父泰清のとき，すでに出雲に常駐し，土着したものである（鰐淵寺，千家文書）。」（『塩冶高貞と南條氏追録』）

塩冶という姓は，出雲の土地の名前に由来する。高貞は塩冶氏の三代目に当たる。「塩冶氏は，すでに穀倉・出雲平野の一画をはじめ，安来平野の農業生産物・奥出雲鉄生産・安来・美保の浦からあがる関税による利益等により，豊かな経済力に支えられ軍事的にも強大化していったであろう。」（同書）

平和な時代であれば，彼らの豊かな力が出雲を中心に大きく羽ばたいたことだろう。だが時は北条幕府打倒を皮切りに南北朝の争いの時代のさなかであり，『太平記』に記される史実と平行する事件が彼らの身上にも起こった波乱の時代であった。

出雲守護となっていた高貞は，追われた後醍醐天皇が隠岐島に流され，再び統治をもくろみ東に向かう時，いずれも関与している。それが縁で塩冶高貞は後醍醐天皇の後の一人，絶世の美女の弘徽殿を賜ったという。（『羽衣石南條氏盛衰記』）

「塩冶高貞と弘徽殿・西台（早田宮の妹）との間には，二児があったが，長子は母と共に討たれ

二男は高貞の臣・八幡六郎が付近の草庵に住む老僧に託して出雲に送らせた。」(『塩冶高貞と南條氏追録』)

これは、後の南條貞宗である二男の運命を暗示している。足利尊氏の高臣、高師直が、美女の評判高い塩冶高貞の妻に横恋慕したあげく、尊氏に高貞が南朝と通じていると讒言し高貞を亡き者にして弘徽殿を我が物にしようと謀った結果であった。しかも高貞には多くの兄弟がいたようだが、弟の一人が兄を裏切り京を逃げ出そうとする高貞と弘徽殿らのことを高師直・師泰兄弟に告げ口し、彼らはすぐに後を追い、現在の姫路の陰山というところで追いついたために、弘徽殿及び長子は自害するという悲惨な事件となった。一足早く出発した高貞は出雲まで戻るがそこで妻らの最期を知り、彼も自害して果てる。

残された三歳の二男が、尼僧と僧侶に「越前ノ国南条郡宅良の里(福井県南条郡今庄・小倉谷)」まで連れて行かれ密かに育てられ生き延びる。育った土地の南條を姓とし後には足利義詮將軍に仕え東郷の領を得て、この羽衣石山に開城したというわけである。

いささか史実を挟み羽衣石城主の南條貞宗の身上を明らかにしてみた。羽衣伝説から遠ざかった感があるが、むしろこうした過去を持つ貞宗やその子孫の栄枯盛衰が古い白鳥伝説と呼応していること、神話・伝説の分布図との関わりからは彼らの源が、古い羽衣伝承のある近江に置かれることなどは興味深く思われる。

VI. おわりに

水野祐は、その『羽衣伝説の探求』の最後の方で、日本の羽衣伝説が「古代史のうえに及ぼす意義」についてまとめる。その一に次のように言う。

「中央圏の古い形の羽衣伝説は、とくに蒙古や、朝鮮の天女が山間の沼沢や泉井、池沢に飛来し、そこで狐師と神婚し、その裔孫が始祖となるという、神婚説話的始祖伝統の形態をとる。その系統の影響も受け、とくに新羅系移住民集団によってそうした朝鮮民族間の伝統が、日本海沿岸の地域に拡散され、あるいは丹後の奈具社の縁起伝説となり、あるいは近江の伊香連の始祖伝説となって、日本の古代史上にある意味をもたらす、歴史的にも重要な伝説となっている。」(p224)

そして水野祐は、近江の伊香を初めとして近江の北の方に神社、それも新羅系神社の多いことを数字を以て示している。

その上で、私は上述のヤマトタケルと伊吹山の話が気になってくるのである。谷川健一氏は古代の伊吹山を次のように描く。「要するに伊吹山が古代の金属精錬に従事していた伊福部氏の尊崇する山であり、そこに伊福部の神である雷=蛇神が祀られていたことをみとめるだけで充分である」(『青銅の神の足跡』p.147)。こうして山陰に広く分布するタタラとも近江は呼応する。

ヤマトタケルに白鳥処女伝説を認めるとき、英雄の存在に関わる神的性格が一つのエンブレムとして英雄像を昇華していたのではなかったかということは十分に想像できる。さらには、鉄文化をもたらした渡来系の人々のアイデンティティとして或いは彼らの共通のコードとして羽衣伝説は日本古代史の中に或る役割を果たし続けていたのではなかったか、と思われる。私は東郷の羽衣石城を築いた実在の南條貞宗の、その背後に横たわるそうした古代の現実を透かし見てみる事に強い興味を覚えるのである。

注

- (1) 2007年9月8-9日、文部科学省科研調査A「世界神話のコスモロジー」(篠田知和基代表)の国際比較神話学シンポジウム〈天空遊行一天への道 Le Voyage vers le ciel〉が京都の花園大学で行われた。筆者は研究分担者として、フランス人研究者らの発表の司会をすると同時に、表題の神話・伝承を簡潔に紹介した。本論はその口頭発表をさらに発展させたものである。
- (2) 『伯州羽衣伝説資料』野津龍編 2002年など。
- (3) たとえば「天人女房」というタイトルで、このように話は始まりおわる。「倉吉の耳という所に、耳の六兵衛という人がおって、こういう話を伝えておったがや。昔、今でいえば東郷町あたりの獵師が山へ獵をしに行っただって。大きな湖のほとりまで来たところが、とてもええ匂いがしてきた。(・・・)二人は笛や太鼓を持ってきて、その山のとっぺんで、お母さんに聞こえるようになって、笛を吹いて、太鼓を打ち鳴らしたってなあ。今でも打吹山ちゅうて名付けとるのはそういうわけがあるからだって。
で、その東の方にある羽衣石山(うえしやま)ちゅう山は獵師が羽衣を隠した山だそうだがやあ。」(『鳥取の民話』、稲田和子編著、未来社、1976年)
或いはまた「羽衣石(うえし)山の天女」においては、「昔、一人の百姓が、東伯郡東郷町の羽衣石山の近くを過ぎようとすると、大きな岩の上に見も知らぬ美しい衣が干してあった。(・・・)今でも、この山を打吹山と呼ぶのは、その昔、天女の子どもが、山上で母を慕って一生懸命太鼓を打ち、笛を吹いたことによるといわれる。」(『因幡伯耆の伝説』、野津龍編著、第一法規、1975年)
- (4) 第十七回国民文化祭・とっとり2002 羽衣伝説フェスティバル参考資料 『伯州羽衣伝説資料一付日本三大羽衣伝説』野津龍編 倉吉市・東郷町実行委員会発行、2002年10月1日。その秋、私は海外出張中で不在であった。興味深いシンポジウムを直接聴けなかったのは大変残念に思う。
- (5) 水野祐 『羽衣伝説の探求』：著者は北海道のアイヌ伝説も採り入れている。また伯耆ではないが『出雲国風土記』から、貝がウグイス(法吉鳥)に化して飛んでいき、法吉郷に鎮まったとう話を記しているが、同時に次のように言っている。「『出雲国風土記』には、羽衣伝説、また白鳥についての伝説はみえない。出雲は白鳥の飛来地であるにもかかわらず、奇妙にそこにはこの伝承をみない。」pp.60-62。
- (6) 水野祐 『羽衣伝説の探求』。ここでは、ヴァリエーションとしてこの余呉湖の伝承が菅原道真の出生の始祖伝説にもなっている。妹は蛇であった。
- (7) 『丹後みねやま羽衣伝説』、京都府峰山町企画商工課発行、1998年。
- (8) 『同書』所収。「逸文丹後風土記一奈良社一」に記されている話。
- (9) 水野祐 『羽衣伝説の探求』：神仙伝説の影響として考えられるのは、河内の羽曳野に伝わる伝説であり、ここでは若者と仙女とはじめから記されているので「神仙伝説」の影響を考えることが出来ると著者は示唆する。とすればこの伝承は、余呉湖や丹後の伝承よりもずっと後の話ということになろうか。
- (10) 谷川健一 『青銅の神の足跡』第三章 最後のヤマトタケル：「『日本書紀』では大蛇となっている。『源平盛衰記』には、この大蛇というのは胆吹(いぶき)大明社の法躰(ほったい)

であるといっている。そしてスサノヲが八岐大蛇を退治して得た剣をアマテラスに献上すると、大神はたいへんよろこんで、これは自分が天の岩戸に閉じこもったとき近江国の胆吹岳に落ちた剣にちがいない、といったという話を記している。『日本書紀』によれば、その剣はヤマトタケルのもっていた草薙（くさなぎ）剣でもある。（・・・）いずれにしても、ここには剣と蛇との関連がよよく示唆されている。」pp.144-148. 小学館ライブラリー, 1995年。

(11) 『塩冶高貞と南條氏追録』, 河本英明編著, いなば庵発行, 1994年。

(2007年10月5日受付, 2007年10月15日受理)